

2021年12月30日 Vol.187

### 2021年の大納会を迎えて

本日は大納会。2021年の株式市場にも様々な出来事がありました。コロナショックから2年近く経過し、今年半ばの感染拡大は私たちの生活に少なからぬ負の影響をもたらしてしまいました。ワクチン接種が進む中で国内での感染が収束に向かう中で海外では再び感染拡大が続き経済にも混乱を生じましたが、米国中心に株式相場は堅調な推移を辿りました。一方では貿易摩擦やウイグル人権問題に加え、不動産市場の冷え込みが業界トップの恒大集団の実質上の破綻を招いた中国経済への不安感や民主化問題から香港株が下降トレンドを描き、その流れは日本にも及び半導体関連や市況産業型の資源、海運株などを除き日本株の上値は重い展開が続きました。こうした中で今年、日本の株式市場にはQDレーザ(6613)から昨日のIFGS(4265)まで125社が上場し、とりわけ今月は32社もの企業が一気に上場し百花繚乱のラッシュ状態が見られました。

主力銘柄の中でもソフトバンクグループ(9984)やファーストリテイリング(9983)は中国問題もあり年後半は下落トレンドを続けたほか、JASDAQやマザーズ銘柄には幅広く売りが続き、年末にかけ調整色を強めました。強い株と弱い株の明暗が分かれ、投資家の皆さんにとっては悲喜こもごもの展開となったものと推察されます。堅調な米国株式市場に日本からのリスクマネーは向かい、主力だった外国人投資家が日本株を直近数カ月で1.3兆円売ったとのデータから株式市場での日本株への期待感は薄れているとの危機的な状況ながら市場には来年に期待する声が聞かれます。確かにPBRなどの指標面での割安感がありますが、企業の利益成長性、効率性、生産性など向上させないと海外投資家から見た日本株への評価は低下してこざるを得ないというのが率直なところです。

こうした視点で個人や機関投資家を問わず投資家の期待は社会システムの改善、効率化を果たすべくDX、AI、IoTに向かうと見られます。GAFAMやテスラ、ファイザーなど米国企業の力強さに対して日本の企業皆とも言えるトヨタや東京エレクトロン、ソニー、キーエンス、村田製作所、信越化学などのモノづくり世界企業群の今後の活躍に期待するしかないのか、日本からの新たな世界企業の登場こそが株式市場復活の鍵となると思われます。コロナ禍で停滞した経済が復活の兆しが見えてきた中で株式市場はむしろ停滞気味に推移していますが、この局面は新たな投資チャンス、投資対象が生まれていると考えられます。

数多くの今年のIPO銘柄の中には実は目立たないながら世界的企業も含まれています。例えば糖尿病マネジメント事業やヘルスケアソリューション事業を世界125か国で展開中のPHCホールディングス(6523)は本年10月に上場しましたが、残念ながら公開価格3250円を大きく下回って推移しています。一方ではニッチ市場のビジネスでまだ小規模ながら国内の米穀包装資材や包装機械で高いシェアをもったJASDAQに今月2日に上場したのむら産業(7131)は残念なことに不人気で流通時価総額10億円割れの悩ましい位置にあってたりします。様々な個別銘柄の株価が低迷する中で個人投資家各位の有望銘柄

## 東京 IPO 特別コラム

---

を見出す努力に新たな年を迎えるにあたり、大いに期待したいと思います。

これにて本年の本コラムもおしまいとなります。この1年のご愛読に心より感謝申し上げますとともに来る2022年が皆様にとって輝かしい年となることを祈願したいと思います。2022年もまた引き続き、本コラムをご愛読のほど賜りましたら幸いです。

(東京IPOコラムニスト 松尾範久)